日本向けGNH　武士道より「名誉」

「今度のテストで 100 点採ったらご褒美に…」なんて似たような話は子供の頃にたくさん聞いた事があると思う。一般的に人間誰しもご褒美は嬉しい。しかし，毎回同じご褒美では子供とて満足はしなくなっていく。初回はアニメのカードでよくても，気付けばゲーム機になっていたり，自転車になっていたり。際限なく高価な物へとご褒美は変わっていく。大人になっても変わらないであろう。一度高価な物を手に入れれば，次はさらに高価な物を欲しがちである。人間の欲望は際限を知らない。

しかし，武士社会においては“名誉”の方が“褒美”よりも大切にされていたようである。武士は自分の名を残す事を人生の目標としていただけに，不名誉を被り，名を汚すことは『不名誉は木の切り傷のごとく，時はこれを消さず，かえってそれを大ならしむるのみ（新渡戸稲造著(1899)，矢内原忠雄訳(1938)　武士道　岩波文庫より一部引用）』とある通り，自分の人生の中で名を残す大きな障害になるため，“褒美”よりも遙かに“名誉”を大切にしていたのではなかろうか。

「限りある物量に対して，人間の精神は無限である」この文章は戦時中，善い使われ方をしていなかったと思うがその通りであると思う。現在の社会に当てはめて考えれば，“人間の欲望は，どこまでも際限なく求めてしまう。物質的な充足（豊かさ）は，限りある物量の為にどこかで限界に達してしまう。だが精神的な充足（豊かさ）は，物量に左右される事がないので可能と言えよう”と理解できないだろうか。物質的に豊かになるのには限界があると思う。しかし精神的に豊かになることは，限りある物質（経済的，物量的）に左右されないので「誰しも手に入れることの出来る豊かさ」と言えよう。

武士道に『人々己に貴き者あり，思わざるのみ』とある通り，人それぞれが内に光り輝く所を持っている。その輝くところに各々が気付き，仕事，生活等へ役立てることが出来たならば，誰しも存分に個々の存在価値を見出しつつ能力を存分に発揮し，自分の名を後世に残すことも出来るのではなかろうか。「名を残すこと」それはたとえ物質的，経済的に満たされなくとも，個人がこの世に生を受けてきた意義を感じ，一生の内に感じることの出来る人生最大の幸せかもしれない。

文責　瀬畑陽介

[参考文献]　新渡戸稲造著，矢内原忠雄訳『武士道』岩波文庫，1938 年

Copyrights(C) GNH-STUDY.COM All right reserved.